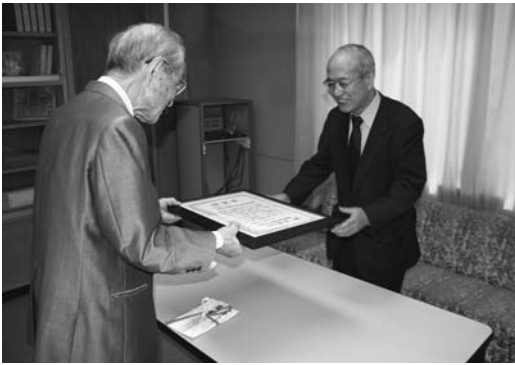


## 化学及血清療法研究所から 高額の御寄附

旧財団法人化学及血清療法研究所が本年四月一日より一般財団法人化学及血清療法研究所として再出発されたことを記念し、地域への還元策として、地域医療の振興のために六月三日、当公益財団法人に対して五〇〇万円という高額のご寄附がありました。当財団からは理事長が感謝状を贈呈してお礼の意を表しました。化学及血清療法研究所長殿には当財団の発足時から理事を務めていただいており、また両財団は十四年に亘って「肥後医育塾」を共催しているなど、これまでも並々ならぬご支援をいただきました。当財団は本年から公益財団法人に移行していますが、公益法人は公益事業費が全事業費の五〇%以上を占めておく必要があることなどから収益事業を拡大できない仕組みになっているため、寄附収入を増やしながらか公益事業を実施していかざるを得ません。本年度新たな公益事業として「熊本県医療人育成総合会議」の開催を予定していますが、この度のご寄附はその財源などに活用させていただきます。

一般財団法人化学及血清療法研究所が今後益々興隆に向かわれますよう祈念いたしますとともに、当財団へのご支援を今後とも続けていただきますようお願いいたします。



神原理事長（左）から感謝状を受け取る  
化血研の水野常務理事

## 公益財団法人肥後医育振興会に期待する



熊本県医師会長 福田 稠

熊本は古くから教育に熱心なところで、とりわけ医学教育は日本史的に言えば、近世の再春館に始まり、近代の古城医学校、現代の熊本大学医学部へとその伝統は連綿と受け継がれています。私事で恐縮ですが、私の病院は県立第一高校の正門の前にありますが、この第一高校は、かつて熊本洋学校と古城医学校のあったところでした。大正の末、祖父が病院を移転するにあたり、祖父自身が熊本洋学校の系譜を引く熊本英学校の出身であり、また、曾祖父が古城医学校で学んだ事からこの場所を選んだと聞いています。

熊本洋学校は明治四年、米国の退役軍人、L・L・ジェーンズを招いて、西洋の学問や文化を教えるために開設されたもので、海老名弾正、蔵原惟郭、徳富蘇峰といった、後に全国的に活躍した人達が学んでいます。特に、洋学校が閉鎖された後、同志社に進んだ人達は、「熊本バンド」と呼ばれ、我が国のキリスト教界に大きな足跡を残しました。

古城医学校は、同じく明治四年、オランダ人医師マンズフェルトを長崎から招き、西洋医学を教えるために開かれたものです。祖父の書き残したものにより、医学者の教育と同時に古城病院での診療も始められ、その評判は、例えば眼底検査については「真暗な部屋に婦人を連れ込んで、あやしい事をしてくそうだ」とか、外手術については「生き肝を抜くようす。病院の前の橋（現在の第一高校正

門前の橋）は、一度渡ったら生きて帰れない」という意味で、「冥土橋」と呼ばれ、病院長の吉尾圭斎、病院幹事の内藤泰吉、医学教授の寺倉秋提の名前を織り込んだ「病院はヨシオヨシオと云うけれど、命ちゃんイトウ、末はテラクラ」という歌を作って、医学校の横を流れる船場川の船遊びの座興に、三味線や太鼓で囃したてて歌ったそうです。ただ、西洋医学の治療効果は靦面で、その評価は次第に上り、マンズフェルトに直接教えを受けたものだけでも一三二人に上り、西洋医学は全県下に拡がりました。マンズフェルトは、ここで学んだだけでは不十分であり、東京へ行ってさらに学問を深める事を勧めたため、この中から、東京帝国大学へ進んだ北里柴三郎、浜田玄達、緒方正規等は、国内はもとより、世界的に活躍しました。言わば、熊本は「西洋医学揺籃の地」で、この熊本で、高度先端医療を極め、優秀な医師や医学者を育てる事は大変意義深い事だと思えます。

来年は、九州新幹線が全線開通しますが、熊本は九州のまん真ん中にあり、地勢的にも九州の医学の中心に相応しいところだと思います。肥後医育振興会はこのたびの公益法人改革で、公益財団法人の熊本県認定第一号となりましたが、これを契機に、さらなる飛躍をとげられ、熊本の医学研究や医学教育が大いに振興し、若い学徒が熊本の地から世界に羽撃いて行く事を期待しています。